

1. はじめに

本発表の目的は、反局所性(anti-locality)に焦点を当て、CP 領域内であれ、vP 領域内であれ、反局所性が、あらゆる内的併合(Internal Merge)に関与していることを示し、併合操作に課せられている制約ではなく、最小探査(Minimal Search)に課せられている制約から帰結として生じるものであると論じることである。さらに、ここでの議論を通し、近年のボックス理論(Box Theory) (Chomsky 2023)を支持すると論じる。

2. CP 領域の反局所性

本節では、CP 領域内の反局所性に関わる現象を考察する。第1の具体例として that 痕跡効果が挙げられる(Perlmutter 1971)。that 痕跡効果に対する近年の研究では、[Spec, TP]から[Spec, CP]による移動が局所的であり、非文となると説明される(Erlewine 2020)。このため、(1)が示すように移動の経路内に副詞句などを介在させることで文法性の向上が観察される(Culicover 1993)。

(1) This is the tree Op_i that I said that *(just yesterday) t_i had resisted my shovel. (Culicover (1993: 558))

第2の例として、主語内部からの抜き出しが挙げられる。Chomsky (2008)は、他動詞の主語句の内部からの抜き出しは非文となると主張した。しかし、Zyman (2021)によると、このような抜き出しの非文法性は、移動が局所的となるためである。このため、(2)が示すように wh 句の移動の経路内に副詞句を介在させると文法的となる。

(2) (?)Of which car, according to your recollection, did the driver cause a scandal? (Zyman (2021: 528))

CP 領域内で反局所性に関わる第3の現象は、[Spec, CP]に移動した要素の内部から、別の要素を抜き出すことである。[Spec, CP]に移動した要素の内部から、さらに別の要素を抜き出す場合、(3)が示すように、同一節内であれ可能であり、そのような場合、副詞句が介在が必要となる。

(3) [About VOWEL HARMONY]_i, according to your recollection, [SOME PROPOSALS t_i] we discussed at length.

以上のように、先行研究において CP 領域内で反局所性に関わる現象が存在することが示されている。

3. vP 領域の反局所性

本節では、vP 領域内での反局所性現象を論じていく。第1に、二重目的語構文の間接目的語自体の抜き出し、また、間接目的語内部からの抜き出しである。間接目的語自体、または、その内部の要素を、いわゆる A移動することはできない。本発表では、この抜き出しが不可能な理由は、反局所性にあると主張する。つまり、間接目的語は、vP のすぐ下の機能投射の指定部([Spec, Applicative])に位置するが、間接目的語自体、もしくは、その内部の要素が、すぐ上の vP の先端位置への移動が生じると、その移動は局所的となる。その結果、移動が容認されないと主張する。第2の現象は主語句内部からの抜き出しである。Chomsky (2008)は、繰り上げ構文の主語や受動文の主語の内部からは抜き出しが可能であると論じた。上述の他動詞との対比を説明するため、Chomsky (2008)は先端条件(edge condition)を仮定する。しかし、本論では、この条件は反局所性条件の一例であると主張する。具体的には、主語内部の wh 句が vP の先端位置に移動するような移動は局所的な移動となってしまう、非文になる。この主張が妥当であることは、Zyman (2021)が提示する次の文から示される。

(4) (?)Of which car did the driver, according to your recollection, cause a scandal? (Zyman (2021: 530, n. 18))

主語と動詞の位置に副詞句が介在するため、移動の経路が非局所的となり、文法性が向上したと考えられる。

4. さらなる拡張

この節では、反局所性に関わる他の現象を論じる。まず、定名詞句内部からの抜き出しを阻止する定性効果が挙げられる(Fiengo and Higginbotham 1981)。定名詞句が、元位置から上位の位置へと移動するという仮定を採ると、内部からの抜き出しができないことは反局所性が原因であると言える。つまり、定名詞句が上位へ移動した結果、内部の要素の、vP の先端位置への移動は局所的となる。この結果、非文となると説明できる。同様の説明が、不変化詞構文や外置構文にも当てはまる。不変化詞構文では、不変化詞よりも上位に名詞句が移動する場合、その名詞句の内部からの抜き出しができない。また、外置構文では、外置された要素が上位に移動するため、その内部から抜き出すことはできない。いずれも反局所性が原因であると考えられる。

5. 付加詞節内部からの抜き出し

この節では、付加詞節内部からの抜き出しを論じ、この現象にも反局所性に関与していると論じる。一般的に、

定形の付加詞節内部からの抜き出しに関しては、非文となることが多く、一方、非定形の付加詞節において、容認可能な抜き出しが多く観察される(Truswell 2011)。この対比の具体例は(5)と(6)に示される。

(5) *Who did John go home [after he talked to]? (Truswell (2011: 176))

(6) Which book did John design his garden [after reading t]? (Truswell (2007: 17))

この違いは、反局所性が関わる。定形の付加詞節の場合 C が最上位の主要部となり、抜き出される wh 句は[Spec, CP]を経由し、主節の vP の先端位置へと移動することになる。しかし、この移動は局所的な移動となり、非文となる。一方、非定形の付加詞節では、C が欠如的(defective)であると考えられる。具体的には、C には wh 句を引き付ける能力がないと仮定する。このため、wh 句は付加詞節内部の vP の先端位置から[Spec, CP]を経由せず、主節の vP 先端位置へと移動することになる。このような移動は局所的でなく、移動が容認される。

さらに、付加詞節内部からの抜き出しは、定形節の場合であれ、容認されることがある。

(7) Which email account would you be in trouble [if someone broke into t]? (Chaves (2012: 468))

このような、定形節には次の2つの特徴が存在する。第1に、当該の定形節内部では項の前置が容認されず、第2に、認識様態の助動詞や構造上、上位に位置する副詞が生起しない(より詳細は、Haegeman 2003 以降の研究を参照)。この2点の特徴から、本論では、C が欠如的であると仮定する。このため、抜き出しを容認する定形の付加詞節は、非定形節と同様、C には wh 句を引き付ける能力が欠如している。移動が可能な場合には、[Spec, CP]を経由せず、移動の経路が局所的となることなしに移動が生じていることになり、文法的となる。

6. 寄生空所構文

この節では、寄生空所構文を論じる(Engdahl 1983, Kanno 2021)。本発表では、フェーズの先端位置に複数の wh 句が生起することはできないと仮定する。この仮定により、反 C 統御(anti-c-command)制約が導かれる。具体的には、目的語の wh 句が vP の先端位置へと移動した際、主語が wh 句であると、複数の wh 句が同一の先端に存在していることになる。このため、このような関係は非文となる。しかし、寄生空所構文での興味深い特徴は、wh 句が主語ではなく、主語句の内部に埋め込まれると容認可能となる点である。

(8) Which boy did Mary's talking to __ bother __ most? (Engdahl (1983: 5))

これは、目的語の wh 句が vP の先端位置へ移動したとしても、他方の wh 句は主語内部に埋め込まれているため、同一の先端に複数の wh 句が存在していることにはならず、上述の制約の違反にならないためである。

7. 理論的帰結

本発表では、反局所性に焦点を当てた。Chomsky (2001)以降、併合は自由に適用されると仮定されている。このため、併合の一形態である内的併合にも制限が存在しない。このような理論的枠組みにおいて、反局所性の存在は興味深いものとなる。なぜならば、内的併合に制限が課せられているように見られるためである。しかし、実際には、最小探査に課せられる制約であると主張する。上述の that 痕跡効果の研究では、wh 句は[Spec, TP]から[Spec, CP]へは移動できないとされる。この点は、C が wh 句を探査するとき、[Spec, TP]が探査領域とならないことを示す。このため、wh 句の探査を行う場合、vP の先端位置のみを探査するという制約があると考えられる。

この考えは、近年展開されているボックス理論を支持するものである。ボックス理論では、内的併合は1度のみ生じ、統語上、wh 句が vP の先端位置に留まり、ボックス(Box)に入れられることになる。本論で展開された主張はこのボックス理論の妥当性を示す。さらに、本論の寄生空所構文の分析の際、wh 句が先端に1つのみであるという制約を仮定した。このため、ボックス理論で仮定されるボックスも先端に1つのみと考えられる。

*本研究の一部は、JSPS 科研費(JP23K00580)の助成を受けている。

主要参考文献

Chaves, Rui P. (2012) "On the Grammar of Extraction and Coordination," *Natural Language and Linguistic Theory* 30, 465-512. / Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA. / Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Mari Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA. / Chomsky, Noam (2023) "The Miracle Creed and SMT," ms., University of Arizona/MIT. / Engdahl, Elisabet (1983) "Parasitic Gaps," *Linguistics and Philosophy* 6, 5-34. / Haegeman, Liliane (2003) "Conditional Clauses: External and Internal Syntax," *Mind and Language* 18, 317-339. / Kanno, Satoru (2021) "The Licensing of the Parasitic Gap Operator," *Studies in English Linguistics and Literature* 31, 139-167. / Truswell, Robert (2011) *Event, Phrases, and Questions*, Oxford University Press, Oxford. / Zyman, Erik (2021) "Antilocality at the Phase Edge," *Syntax* 24, 510-556.